

1-4-9. 徳之島町企画課（鹿児島県徳之島町）

（1）アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】25,396 人（徳之島三町）

【面積】247.85km²

【地勢】

徳之島は中部から北部が山地で、その周囲の南部から西部にかけては低平な斜面が広く分布しており、海成段丘がよく発達する。

山地の周囲を取り囲むなだらかな地域には、基盤岩のほか、標高210m以下には主に中期更新世の堆積岩（サンゴ礁複合体堆積物）が分布する。

【気候、自然】

亜熱帯気候に属する。近傍を流れる暖流の黒潮とモンスーンが大きく影響して年間降水量は2000mm以上に達する。そのため、亜熱帯域に多雨林が発達し、特異的な地域である。

【歴史】

古くには琉球王朝に統治されていたが、島津藩の侵略により島津藩の領土となる。昭和 20 年にはアメリカ軍の侵略により米軍の統治下となる。昭和 28 年 12 月日米交渉により奄美群島が本土に復帰し、鹿児島県に編入される。

【観光】

犬田布岬、犬之門蓋等の自然景観地に加え、ソテツトンネルや畦プリンスビーチなど風景探勝等による島内周遊利用が多い。また、400 年以上前から島内にて行われている闘牛も大きな観光資源となっている。

【地域資源の概要】

徳之島では昭和 30 年代に減反政策の施行により、稲作からサトウキビへ転作が進められ、島内での田んぼは一部を残し消失した。田んぼは、水生生物にとっては貴重な生息環境であり、田んぼの消失によりさまざまな生きものが姿を消した。そのような中、徳之島町井之川集落では、平成 29 年度に集落と自治体が共同で田んぼの復活プロジェクトを計画している。そこで、田んぼを環境教育のフィールドと捉え、動物や植物が恒常的に生活できるよう復元された小規模な生活空間（ビオトープ）を形成し、季節ごとの生物相の違いや水のろ過作用などを学ぶ場として活用する。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

徳之島を含む奄美群島は、国内最大規模の亜熱帯照葉樹林やアマミノクロウサギをはじめとする固有又は希少動植物の宝庫となっており、これらが評価され、平成 29 年 3 月 7 日 奄美群島国立公園が誕生し、平成 30 年夏「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」世界自然遺産登録に向け環境配慮型の公共事業の施行等さまざまな事業が展開されている。

観光においてはエコツアーガイドの養成や滞在型観光メニューの検討がされており、島外客への対処について行政や民間が一体となった取組みが進められている。しかしながら、地域に住む住民が地域の良さを理解していない現状があることから、小学校での総合的な学習の時間を活かした環境教育等、地域の自然を身近に感じられ保護・保全に向けてのプログラムの構築作りのため、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業を活用させていただいた。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日	時	平成 29 年 3 月 24 日（金）～平成 29 年 3 月 26 日（日）
場	所	徳之島町井之川集落
アドバイザー		川嶋 直 氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）
参加者		計 9 名 徳之島町役場 企画課（係長・主事）3 名 徳之島エコツアーガイド受講者 3 名 徳之島町文化協会会長 1 名 徳之島町文化協会会員 1 名 鹿児島県自然保護推進員 1 名
スケジュール・方法		【1 日目】 午前・午後：移動 【2 日目】 午前 10：00～12：00 まち歩き、田んぼ（2 カ所）視察 午後 13：30～14：00 参加者からの意見聴取 14：00～16：30 川嶋様よりご講演 ・環境教育の事例 ・フィールドでのアイスブレイク 質疑応答 【3 日目】 午前・午後：移動

(3) アドバイスの内容（議事録）

午前中に行った現地視察では、今回の視察対象集落出身者の方から集落の歴史・成り立ちをガイド説明し、その説明内容について下記のアドバイスをいただいた。

- ・参加者に知っている情報を伝えるだけではなく、参加者の表情などを伺いながら求めている情報を引き出すのもガイドの仕事。
- ・全て言葉で伝えようとすると、受け取り側は覚えきれない。パネルなど視覚を使った表現を加えることで、参加者の知識量は高まり、さらに深い情報を理解する等の効果が見込める。

午後の部では、参加者のエコツアーガイドの方法やその悩みについての意見聴取後、全体の講義があった。

講義では、川嶋氏が以前勤めていた山梨県にあるキープ協会の成り立ちや身近にある環境を活用した参加者の年齢・職種を問わないアイスブレイク方法を学んだ。



ガイドによる集落案内



田んぼの視察



午後の講義



午後の講義

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

まち歩きの際の注意点や表現方法、効果的な伝え方を学び、参加者は熱心にメモを取っていた。中でも、学んだ知識を全て伝えるのではなく、相手の表情やレベルに合わせガイド方法を変え、相手の知っている情報を聞き出すことが相手の満足度を高めるとの意見は、大変勉強になった。

2) 今後、期待される効果

今回学んだアイスブレイク方法は、さまざまなフィールドで行えることから、海や川、森林でのガイドにおいて活用されることが期待される。また、田んぼ視察の際に、昭和 40 年頃まで徳之島では集落ごとに「田植え唄」が存在していたことから、田植え体験のみならず、「全島田植え大会」の開催について提言をいただいた。参加していた徳之島町文化協会会長は、実現に向け取り組みたいと述べた。

3) 今後の取り組み

町では、平成 29 年度に今回の視察地域である井之川集落において「遊休農地の田んぼ復活プロジェクト」を計画しており、上記に示した「全島田植え大会」の開催は町おこしにも期待されることから、住民・集落を巻き込んだエコツーリズムの推進に取り組む。

(5) 今後の取り組み推進にあたり参考になった事例、その感想

1) 参考となった事項

アドバイス内容にもあるように、身近にある環境を活用した参加者の年齢・職種を問わないアイスブレイク方法は、エコツアーガイドを目指す参加者にとっては非常に良い内容でした。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

川嶋 直氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）

1) 地域における取り組みの現状と課題

①取り組みの現状

徳之島へは昨年に引き続き「環境省エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」としては2年連続の訪問だ。昨年は天城町からの声掛けで訪問し、今年は徳之島町からのお声掛けの訪問だった。

徳之島はエコツーリズムについては、取組をはじめて間もない始動期にあたり、奄美群島広域事務組合を主体に、奄美群島全体でエコツアーガイドの養成講座が進められているとのことだった。エコツアーガイドの養成講座では、エコツーリズムの基本理念の説明、リスクマネジメントや救急救命の講習を学び、フィールドでのプログラム作りを取り組んでいるという。今回もこの講座の参加者が「井之川集落」のまち歩きに数人参加されていた。

今回の視察では、徳之島のエコツアーガイド・集落関係者と共に「井之川」の集落を歩きながら地域の資源の説明を受けた。

②課題

エコツーリズムの推進にあたって、中心となる組織が不存在となっており、上記の講座を受けた方が宙に浮いた状態となっているという問題があるようだった。講座修了者からも「実際に観光客の方が『徳之島のガイドをして欲しい』と思っても、一体どこに問い合わせたらいいのか、その問い合わせ先が現状ではない。」「私（講座を受講したガイド）はパソコンをしないので、観光客からのガイドの依頼はうちの電話にかかってくるのか？それではとても対応できない」との声が聞かれた。

ガイドの養成もようやく始まったばかり、島の観光資源の整理・整備もこれから、こうした資源とガイドを結びつけて「エコツアー」という商品にするにはもう少し時間が必要と感じた。

ただ、国立公園の指定を終え、世界遺産の登録を控えている徳之島にしてみれば、早く上記のような「準備」を進めないと、観光客が大量に押し寄せてからでは遅いのではないかという焦りを感じている方もいるようだった。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

徳之島では、昭和30年代中頃から稲作から畑作へ転換され、サトウキビが主幹作物となり、米作をおこなう田んぼの景色はほぼ姿を消した。稲作の時代には各集落に「田植え唄」が唄われており、集落ごとに異なる唄い方があったと言う。徳之島町では平成29年度には今回視察先であった井之川集落において、集落や学校、大学と連携した「田んぼ復活プロジェクト」を予定しているとのこと。この復活された田んぼを使って、徳之島の各集落の田植え歌が集まる「田植え歌祭り」のようなイベントの開催が期待される。

また、今回最終日に案内された徳之島の東側海岸（亀津集落から井之川集落まで）を見下ろす高台（携帯電話の電波塔建設のために整備された場所）からの眺望は実に素晴らしいもので、この素晴らしい場所のことを島の住民の方たちも多くは知らないとのことだった。この高台に至る道も車1台の通行がやっとの細い道で、大きなガラス窓のサンルーフ付きのワゴン車などでこの道を走るだけでもディズニーランドのジャグルクルーズのように結構「冒険」している気分になれる素敵な資源だった。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

上記にも書いたが、この素敵な資源（自分たちの町を見下ろす高台とそこに至るスリリングな道）の存在を地元の人たちが殆ど知らない（あるいは、興味がない）ことが大事なポイントだと思った。

今回の派遣事業を担当された米山さんも、この担当をするまでこの高台と道の存在は知らなかったとのこと。地域の資源を地域に住む人たちが知らないということ、これは問題でもあり、反面まだまだ可能性が隠されているのではないかと思わせる事実だった。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・エコツーリズムの推進にあたり、行政・事業者・ガイドなどがそれぞれの役割を整理し、それぞれ何ができるかを考え、関係者でプログラム（旅行商品）を練り上げることで可能性が見えてくるのではないかな。
- ・ガイドとして歴史・文化・自然などの知識を、一方的に話し言葉だけで伝えるのではなく、お客様の情報を聞き出してやり取りをしたり、言葉やイラスト・写真などパネルを使って見せながらガイドを行うことなどの「見せる工夫」が必要。
- ・スライドにより山梨県清里で環境教育事業を行なってきたキープ協会の成り立ち・収支状況などを紹介。
- ・同時にキープ協会で行われていた、身近な森林を活かした手頃で参加者の年齢を問わないフィールドの活用方法（体験アクティビティ）の紹介。
- ・キープ協会の例では、鏡やシールなど、簡単な小道具を使いながら「自然を違った角度から見てみる」という提案をしている。こうした「視点を変える」という作業は、なんとなく見ている自然が、全く違う見え方によって輝いて見えるという「視点の変化」を生み、お客様（体験プログラムの参加者）はそのことで大いに驚き感激する。その驚きが訪問地の印象として後々まで記憶に残っていく。
- ・徳之島の森は魅力的だがハブがいることから安易に入ることが難しいのであれば、海岸で出来ることは山ほどあるだろう。夜の砂浜で満天の星を眺めながら寝転び、波の音に耳を傾ける。必要なのは身体の大きさの布一枚（出来れば防水布）だけ。この布一枚で砂で衣類を汚すこともなく、雨の直後でも衣類を濡らすこと無く安心して寝転ぶことが出来る。たった布一枚の用意でその場が素晴らしい場＝「自然を五感で感じる特等席」に変えることが出来る。こうした「体験を助ける小道具」の開発（発見）は全国各地の事例から学ぶことも出来るし、勿論自分たちで開催するワークショップから生まれてくることもあるだろう。
- ・こうした手法は「インタープリテーション」と呼び、知識を一方的に伝えるのではなく、参加者に伝わりやすいように、（小道具を使ったり、視点を変えてみたり）様々な工夫をして伝えるということを大事にしている。
- ・徳之島にはフィールドが身近に存在することから、様々なエコツーリズムの展開が可能であり、多くの関係者でこの島でしか得られないエコツーリズムを作り上げて頂きたい。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

すでに奄美地方全体で認定への取組みを始めている。（始動期）

②全体構想策定への意向について

（上記）

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

従来の希少な生き物を紹介するという考えだけではなく、森林や海に触れ感じて頂けるガイドプログラムの構築。徳之島3町の一層の連携。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

昨年、今年と2年連続で徳之島を訪れたが小さな島にも関わらず2年間で出会った方が一人もダブらなかった。もう少し島内3町（徳之島町、天城町、伊仙町）の連携を良くしないと「エコツーリズムの島」としての全体の魅力をアピールするのが難しいのではないかなと思った。

また、徳之島は現時点ではまだ殆ど観光産業が成立していないように見受けられ「最初の観光産業がエコツーリズム」という幸せな観光業との出会い方が出来る島なのかなと思った。マスツーリズムをエコツーリズムにと、チカライッパイ舵を切るのではなく、最初からエコツーリズムのお客様を開拓し迎えることが出来るのだからそれはそれで幸せなのではないかなと思った。